

## 補足と訂正

### 1：問題の所在

#### 2) 木村毅の考察

##### 補足1：「忠臣蔵」は国民的文学であるのか？

主君に忠義を尽くした忠義の士の物語としての「忠臣蔵」が、国民的文学になったのは、明治40年代以降である。したがって木村の判断は、現代の知識で昔を判断する、歴史学の禁じ手である。

江戸時代は、武士層と庶民層とでは、その受容の仕方が異なる。

武士層の多くは、殿中刃傷事件の直後から赤穂浅野藩の遺臣は、必ず主君の仇を討つと確信して、遺臣の動向を詳しく追跡して分析を加えた書物が次々と出されていた。したがって吉良邸に討ち入った浪士らが切腹した直後に、忠臣の物語としての「赤穂義臣伝」が成立し、幕末まで多くの版が出来て武士層に広く受容された。しかし庶民層は、違った。

当初殿中刃傷事件と赤穂の遺臣の吉良邸討ち入りを期待した江戸庶民の反応は、生類憐みの令に象徴される、五代綱吉の政治に対する反発と、この政治へ風穴が開くことへの期待であった。先般死去した評論家の丸谷才一は、この事件の少し前から江戸三座において人気を博した上演演目が曾我物語であることに注目し、曾我物語で真に親の仇として討たれるべきであったのは將軍頼朝であったという事実を考慮して、赤穂の遺臣の吉良邸討ち入りを期待する江戸庶民の心情は、將軍綱吉を葬りたいとの心情から発していたと推理した。これが討ち入った浪士らが忠義の士であるにも関わらず死を賜ったことへの反発として、彼らが怨霊となって次々と天災異変を起しているとの観念の広がりとなったと丸谷は考えた。

一方事件の少しあとで例えば近松門左衛門などが事件を浄瑠璃に書いた際には、大石に擬せられた大星に、殿が殿中刃傷事件を起さなかったらこんな苦勞をすることもないと述懐させるシーンを挿入したことに見られるように、庶民は武士の忠義の行動には冷ややかな目を向けていた。そしてこの傾向は、浪士の死から49年目に上演された「仮名手本忠臣蔵」で頂点に達する。

ここでは事件は終始恋物語として語られており、忠臣の忠義の行動は脇役に押しやられていた。事件の発端を高師直が塩谷判官の妻に横恋慕して断られた遺恨により、塩谷を罵倒したという設定にし、さらに殿中刃傷のあと、大星の息子の力弥と、塩谷を殿中で後ろから抱きとめた梶川の娘が恋仲で、これゆえ大星は二人の仲を許さない。終に二人は駆け落ちし、大星の住む山科に現れる。二人を追った梶川は、力弥にいきなり切りつけて逆に切られ、苦しい息の下で二人の仲を許すことと高師直の屋敷の絵図面を示して、これを大星に懇願して願いは聞き届けられる。物語の後半の見せ場はお軽勘平の恋の道行きである。しかし勘平は博打に狂って借金をこさえ、その型にお軽を身売りさせようとし、彼女を救おうと金を持って駆けつけた彼女の父親を誤って殺してしまい、自害する。その勘平の残した財布をお軽は大星に託し、大星は討ち入り成功の直後、勘平の財布を出して彼の霊を慰める。

この物語は忠義よりも、叶わぬ恋に苦しむ人々を描く世話物として作られている。この流れの末に、為永春水の、浪士の悲しい心情に焦点を当てた『いろは文庫』があるわけだ。これが江戸期の庶民の「忠臣蔵」の受け取り方であった。

したがって江戸末から明治初に大人となった齋藤修一郎の「忠臣蔵」の受け取り方は、とうぜんのことながら、忠義の士の物語としてのそれであり、彼が幼いときからこの物語に親しんでいたことは、彼が武士身分であることでわかるわけだ。

※以上は、宮澤誠一著『赤穂浪士—紡ぎ出される「忠臣蔵」』（1999年三省堂）と、宮澤誠一著『近代日本と「忠臣蔵」幻想』（2001年青木書店）、さらに丸谷才一著『忠臣蔵とは何か』（1984年講談社）による

なお江戸時代における国民文学を挙げるとすれば、それは源氏物語である。

源氏物語の原文校訂がなされて大量の注釈書が出版された。原文で源氏を読む層も存在したわけだ。そしてこれを読めない庶民のためには、知識人がこれを分りやすく江戸現代語に翻訳した書物も多数出版されたし、源氏物語を時代や場所を移したパロディー物もまた数多く出版された。

江戸時代を代表する小説の二大ベストセラーは、井原西鶴の『好色一代男』（1683・天和3年）と柳亭種彦の『『修紫田舎源氏』（1829・文政12年～1842・天保13年）。どちらも源氏物語のパロディーである。

※以上は、鈴木敏夫著『江戸の本屋』（1980年中央公論）と野口武彦著『源氏物語』を江戸から読む』（1995

年講談社)による

## 補足2：資料1の著者はしがきの訳について

もう少しこなれた日本語にすると

「私の幼い日々の長い冬の夕べには、明かりが行灯に薄暗くともされ、そのスクリーンにほんのりと絵が現れたとき、私はしばしば火鉢のそばに座って、尊敬する母が、部屋の陰鬱な気分を紛らわせるために、47人の浪人のお話をしてくれるのを、畏敬の念の顔つきで聞いていた。

このようにして私の魂は、忠誠の明かりで照らされていたのです。

この作品に表現された47人の浪人の歴史を授けられたのは、まさに母の尊敬する唇からであった。

したがってもしこの本を気に入ってもらえたら、私は読者に、これらの登場人物を描いた江戸の翁のことを考えるのではなく、私がとても再現できなかった雄弁な説明をしてくれた、今は背の高い草の下で眠る私の尊敬する母の霊にたいして、大いなる敬意を払うことをお願いしたい。」

## 補足3：著者はしがきには「母」とあるのに、木村が「祖母」としたこと。

これは、木村が、齋藤修一郎が数えて3歳で母と別れ、祖母に育てられた事実を知っていたことを示している。

このことを示す資料は当時は、彼の『懐旧談』しか存在しない。木村が所属した早稲田大学図書館にも大正7年の武生郷友会版の『懐旧談』があるので、木村はこれを参照したのではないか。

## 2：越前府中本多家と「忠臣蔵」の密接な関係

### 2) 越前府中本多家と赤穂藩・「赤穂事件」との関係

#### 補足4：武林唯七のしころ頭巾

これが本物であるかどうかは不明。昭和初年の所有者の土肥慶蔵（修一郎の母方のまた従弟）はその来歴を知らず、討ち入り成功の後で、大石が隣家の本多屋敷に武林唯七を挨拶に使わした際に、応接した武士に形見を請われて渡したものかとしている。現在所在不明。

#### 補足5：堀部弥兵衛・安兵衛の遺品

①宮川舎漫筆の著者は、宮川政運。幕府御家人。この随筆は1862（文政2）年刊。

②資料6. 安兵衛は最初津軽藩の平野家に養子にはいる予定であったが成立せず、附則資料の安兵衛親類書にあるように、越後新発田藩溝口家の中山家に養子に入ったと、越前府中の忠見家には伝わっている。

③の遺品は本物。資料5・6に付した堀部安兵衛親類書に見られる、忠見三兄弟が二人の遺品を分けて伝承した。これは忠見家が弥兵衛妻の実家であることと、文五郎が弥兵衛の養子となっており、二人の死後に堀部を継いだことと、そして友四郎も同じく弥兵衛の養子となっていたことによる。文五郎は後に肥後細川家に仕官。友四郎は小浜藩の大島家に養子に入る。したがって二人の遺品は今もこの三家に伝えられる。

## 3：齋藤修一郎自身の「忠臣蔵」体験

### 1) 本多家家格回復問題と武生騒動とは

補足6：資料7を読んでもらえば、これは福井藩が越前府中領を手に入れたくて仕掛けた事件だということがよくわかる。福井藩の謀略によって府中藩は取り潰されたということ。この意味でこの事件は、「赤穂事件」と同じ性格の事件であり、本多家旧臣は、赤穂の遺臣のように誓詞血判して主家の家格回復に励んだ。

### 2) 本多家家格問題の解決

#### 補足7：家格回復の背景

明治11年3月に本多氏が嘆願書を東京府に出すと同時に、家格回復斡旋歎願を岩倉具視にも出している。

そして8月には旧藩主の松平氏もまた本多氏家格回復斡旋歎願を岩倉具視に出しているのです。こうした斡旋行為によって家格回復は実現した。

### 3) 本多家家格回復と「いろは文庫」の英訳

#### 訂正1：日本からボストンへの手紙の必要日数

船便で1～3ヶ月としたが、精査してみると、岩手県の盛岡からボストンまでは40日前後。しかも横浜からボストンだと30日前後である。

したがって福井県武生からボストンも盛岡と同様な日数で行くだろうし、東京在住者がボストンに手紙を出した場合には、30日前後で届くことになる。